出来事に関する再生がソースモニタリングに及ぼす影響

○中山 友則¹・兵藤 宗吉²

(¹中央大学大学院文学研究科・²中央大学文学部)

キーワード: ソースモニタリング, (手がかり) 再生テスト, 事後情報効果パラダイム

Recall of event affects following source monitoring.

Tomonori NAKAYAMA¹, Muneyoshi HYODO²

(¹Graduate School of Letters, Chuo Univ., ² Faculty of Letters, Chuo Univ.)

Key words: source monitoring, (cued) recall test, post-event information effect paradigm

目 的

ソースモニタリング(Source monitoring: SM)とは、ある情報の起源についての記憶の想起に関する認知プロセスである(Johnson, Hashtroudi, & Lindsay, 1993)。事後情報効果研究において記憶テストとして SM を用いることがある。事後情報効果研究では出来事の呈示、出来事では非呈示の誤情報を含む事後情報の呈示、記憶テストの3段階からなるパラダイムを用いる。多くの研究で事後情報でのみ呈示された誤情報を出来事にあったと判断するエラーの生起が確認されている。これは誤情報の起源を誤ったこと、つまり SM の失敗によると解釈できる。SM を改善する方法として、出来事に対する再生を行う方法がある(大沼・箱田・大上, 2005)。しかしながら、中山・兵藤(2008, 2009)は自由再生では正答率が低下し、手がかり再生では何の効果も見られなかった。この原因として、自由再生では SM テストの対象となる項目が再生されていない事、手がかり再生では項目は再生できても、それを出来事で見たとされない可能性が考えられた。そこで本研究では、手がかり再生により事前にテスト項目を再生させ、その後自由再生を行う事により上記の問題点を解決し、SM が改善するかどうかを確認する。

方 法

実験計画 3(条件: 統制, 遅延統制, 再生)×4(テスト項目: スライド, 誤情報, 両呈示, 非呈示)の2要因混合計画であった。第1要因が被験者間要因であった。

参加者 大学生42名(男性18名, 女性24名, 平均年齢18.95歳, SD=0.76)が実験に参加した。各条件14名ずつであった。

材料 参加者に呈示する刺激として出来事および事後情報を作成した。出来事は窃盗場面を映した一連のオリジナルのスライド写真26枚であった。事後情報は出来事の内容を文章化したものであった。スライドと事後情報より、スライドでのみ呈示されるスライド項目、事後情報のみの誤情報項目、その両方で呈示される両呈示項目を8項目ずつ設定した。また、スライドでも事後情報でも呈示されない、SM テストのテスト項目として非呈示項目を8項目設定した。また、出来事の再生は手がかり再生と自由再生を行った。手がかり再生は2つの手がかりとテスト項目の語頭2文字からスライド項目を再生させるものであった。自由再生は認知インタビュー法の1つである悉皆報告教示とともにスライドについて再生するよう求めた。

手続き 個別実験であった。刺激呈示および記憶テストはノートパソコンを用いて行った。最初に出来事となるスライドを呈示した。スライド写真は1枚6秒間隔で呈示された。その後、妨害課題を行い、事後情報を呈示した。事後情報呈示後、統制条件はすぐに妨害課題と SM テストを行った。遅延条件は10分の遅延後、妨害課題と SM テストを行った。再生条件は手がかり再生、自由再生後に妨害課題、ST テストを行った。はスライド、誤情報、両呈示、非呈示の各8項目、

合計32項目について、出来事で“見た”か、事後情報で“読んだ”か、その“両方”か、見ていない“なし”から正しいと思う情報源をキー押しで選択する形式であった。記憶テスト後は内省報告と実験の説明を行い終了した。実験時間は統制条件が40分、遅延条件と再生条件が50分程度であった。

結 果

各テスト項目に対して、その項目が呈示された正しい情報源に帰属された場合を正答として正答率を算出した(Table1)。また、誤情報項目と非呈示項目に対して“見た”もしくは“両方”と判断した場合をエラーとして算出した(Table2)。

Table 1

Means (SD) of Correct source attribution								
Item	Slide		Misinformation		Both		New	
Control	.35	(.12)	.52	(.20)	.41	(.18)	.75	(.18)
Delay	.36	(.16)	.49	(.25)	.42	(.22)	.79	(.19)
Recall	.21	(.20)	.40	(.26)	.24	(.20)	.84	(.23)

Table 2

Means (SD) of Source attribution error								
Item	Misinformation				New			
	to Slide		to Both		to Slide		to Both	
Control	.09	(.10)	.22	(.15)	.16	(.13)	.01	(.03)
Delay	.09	(.16)	.21	(.20)	.15	(.13)	.01	(.03)
Recall	.20	(.26)	.14	(.11)	.13	(.19)	.01	(.03)

正答率について分散分析を行ったところ、交互作用が有意傾向であった[F(6,117)=1.94, $p<.10$]。スライド項目と両呈示項目において条件の単純主効果が有意であった[F(2,156)=3.28, $p<.05$; F(2,156)=3.51, $p<.05$]。多重比較を行ったところ、いずれも再生を行った条件の正答率が低かった。一方、エラー率についてはテスト項目の主効果が有意であり[F(1,39)=29.01, $p<.01$]、非呈示項目よりも誤情報項目に対するエラー率が高く、事後情報効果の生起を確認したのみであった。

考 察

実験の結果、出来事について再生を行った条件はエラーの増加はなかったが、出来事で実際に見たはずの項目に対する正答率は減少した。これは先行研究の結果と類似した結果であると考えられる。したがって、本研究で用いたような出来事についての再生は後の SM に対して不利益をもたらすと言える。この原因の1つとして考えられるのは、本研究で用いた再生はいずれも言語的な再生を求めたものであった事である。つまり、スライド項目を言語的に再生したために、言語的に呈示されていた事後情報の項目であると誤ってしまったという事である。実際、再生条件では出来事項目を事後情報で読んだとするエラーが多い。どのように再生を行うことが SM を正確にするのかについて今後の検討が必要である。

(NAKAYAMA Tomonori, HYODO Muneyoshi)